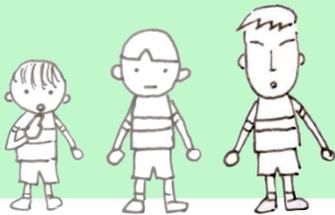


# 知的発達障害の家族の



日々8

大谷 多加志



## 口が達者？

弟についての、両親の評価の1つに「口が達者」というものがある。

なんだかんだと理屈めいたことを言われ、何となく言いくるめられてしまうことがあるからだろう。

ただ、横並びの兄弟としては全く違う感想を持っていた。

それは、「よくわかってない言葉を、都合よく使うなあ・・・」という感想だった。一時期、弟が多用していた言葉に「平等」があった。

例えば、ポテトチップスなどおやつ袋を開けていると、そこにやってきて言うのが「平等に！」だった。弟の言う「平等に！」というのは、今あるものについて「俺にもわけろ！」という意味で用いられていた。実際、その場にいない兄の分も均等にしようとかいう、「平等」本来の意味での配慮はない。ひどい時には、私の器にはポテチが2枚だけ寂しく放られている、ということもあった。さすがに私もそれを見て自分の分のおやつだとは思わなかった（誰かの食べ残しにしか見えない）。

そしてもう1つ、同じ時期に多用していた言葉が「早いもの勝ち」だった。上記のようなおやつを自分が先に見つけた場合は、1人で独占して食べてし

まい、それを非難された時に言うのが「早いもの勝ち！」だった。ただこの「早いもの勝ち」ルールは、他者には適用されない。自分勝手にルールを解釈していたようにも見えるが、実際は「早いもの勝ち」の本来の意味（先に見つけたものが総取りする）を、よく飲み込んでいなかったように思われた。

そんな状況であるので、兄弟としては弟の発する言葉をいちいち真に受けてはおられず、「お前はさっきチョコ食べてたぞ！」「この前は、1人で全部食べたぞ！」と戦い、時に弟を大泣きさせてでもおやつを勝ち取ってきた。



ただ、両親は案外と弟のこれらの言葉を真に受けるところがあった。こちらの正当性をアピールしても、どこか弟の言葉に左右されてしまう。「おいおい…」というつぶやきが、頭に浮かんでは消えていた。

いまなら、このような振る舞いは「自己中心性」や「他者視点」のなさというように理解されるのかもしれませんが、もちろんその要素もあるのかもしれませんが、当時の実感としては『よくわからない言葉を場面にあてはめるようにして使っているなあ』だったように思います。